

山と博物館

第31巻 第3号

1986年3月25日

大町山岳博物館



フクジュソウ

啓蟄に思うこと

今日は二十四節氣のひとつ、啓蟄^{けいち}。暦のうえでは、冬籠りしていた虫たちがはいだしてくる季節ということですが。

例年三月六日にはこのナレーションでニュース番組などがはじまるのですが、やはり、今年もそうでした。山岳博物館の窓辺で春遠い大町平を目のあたりにしながら弁当を食べべていて、この「啓蟄」に出くわしたのです。完璧に虫のはいだす余地のない冬景色との落差のためか一同笑わずにはいられませんでした。私などは凍った土の中でじっとして春をまつ仮死状態のアマガエルの姿などを想像してしまつてよけいにおかしくなりました。

動物の生き方というのは環境に大きく影響をうけるわけで、雪をかきわけて顔を出す根性のあるカエルなどはいません。暖かくならなければ、それを体のしくみが許さないわけです。先人は、動物のこの敏感で正直な季節感覚を見逃すことなく、暦という、もはや季節感を失いかけた、人間のリズム・メーカーに組み込んだと理解することもできます。その意味で暦には一種の鋭さを感じますし、マニアの方々も多いのですが、何故もつと地方の氣候に合った独特の暦というものが普及しなかったのか不思議な気がします。

最近、付属園のカモシカの冬毛が薄くなつてきた、まっ白だったライチョウの羽に少し茶色の夏毛が混ざってきた、または休眠中のアルプスマーモットの動きが活発になつてきた、などといった情報は山博暦のなかの実感できる春のきざしです。

身近な動植物から季節の変化を知るのには、暦にはない楽しさがありますし、何か忘れていた感覚が呼び覚まされる気がします。まだ眠っているのに毎年三月六日に引っぱりだされる動物のためにも、桜前線ならぬ、カエル前線、ホタル前線、スズメシ前線といった動物前線がブラウン管をにぎわす日が来ないものでしょうか。

(編集部員)

オオカミへの挽歌

宮尾 嶽雄

一 信州のオオカミ

長野県下にも、明治時代まではそれでもまだ、各地にオオカミが残存していたらしい。松本藩士、土岐小太郎(明治二年、七九歳で逝去)は、現在の松本市城山、北大銅山の頂上にあつた小鳥を捕る網場をおそつたオオカミを槍で突き、奈良井川を泳ぎわたつて逃げるのを、島内村の河野喜代松とともにしめた。松本藩主はその勇気を賞して、米一俵を与えたという。

南安曇郡有明村では、明治三三年頃までオオカミがいて、維新直前ころ、人家の軒下まで来たのを捕えたそうである。また、北安曇郡平村の犬窟は、オオカミの多いところで、そのあたりの人は、害を恐れ、餌を与える風習があつたとされる。やはり北安曇郡の南小谷付近には、明治二五年頃まで生息し、村人は馬をひいて北城方面に来ていたが、帰り道、切窪から落倉を越えるあいだは、森部落の人を雇つて、オオカミを追つてもらうのが常であつたという(河野、一九三五)。



図1 山住神社のお札

話に登場する動物が、本当にオオカミであつたのか、それとも野生化したイヌであつたのか、今となってはすでに知る由もない。

尾張藩士、内藤東甫(一七八八年没)は、尾張の地誌「張州雜志」に次のような意味のことを書いている。すなわち、「狼」とよく似ている動物に「豺」、俗にいう「山犬」があるが、狼とは別物で、土地の人が言うのには、狼と犬が交わつて生まれたものが山犬で、夕チが悪い。狼は昼間は山から出ないが、山犬は昼も出て人を害すと。

江戸時代もおわり頃には、オオカミはもうきわめて少なくなつていたのかもしれない。上述のような事例が、本当にオオカミによるものであるとすれば、オオカミの生活が極度に追いつめられていたことのアラわれではなかつたらうか。シカやイノシシを捕食することから、オオカミを農業の守護神として大切にすする気風も、かつては全国的にあつたようである。愛知県の三河山間部では現在でも、獣害除けとして、山住神社(静岡県磐田郡水窪町)からオオカミのお札を受けてきて、山畑に立

てている。

オオカミの骨として保存されているものうち、確実にオオカミのものであるのは、長野県下には次の三点しかないといわれる(直良、一九六五)。

- (一) 小県郡鳥帽子岳の山麓で捕獲されたという頭骨一点。上田高等学校所蔵。
- (二) 下伊那郡竜江村尾林で捕獲されたという上顎骨の一部。林繁人氏所蔵。
- (三) 下伊那郡天竜村神原方向で捕獲されたという頭骨一個。オカタの山の神の御神体に使われているという。

縄文時代の遺跡からの出土例も、県下では茅野市北山柘原遺跡(縄文晩期)、小諸市寺の浦遺跡(縄文中・晩期)、南佐久郡北相木村柘原遺跡(縄文早期)などが知られているにすぎないようである。

オオカミは、まさにまぼろしの動物になつてしまつた。ほとんど何の手がかりも残すことなく絶滅していったのである。壮烈といふべきか。本州のオオカミは明治三八年(一九〇五)、北海道では明治三三年(一九〇〇)ごろにみられなくなつたとされる。

二 柘原遺跡のオオカミ

柘原遺跡(長野県南佐久郡北相木村)からは、一、二体に及ぶ人骨、大量の文化遺物とともに、二、三kgに達する哺乳動物の骨や歯が出土している。縄文時代草創期から早期にかけての住居あるいはキャンプ、そして墓地として利用されてきた遺跡であろう。

哺乳動物の骨や歯は、シカ、イノシシ、ニホンザルなどを主体とするものであるが、その中にオオカミの踵骨(かかとの骨)一点、上顎犬歯および下顎第一大臼歯(裂肉歯)など八本の歯が含まれている。

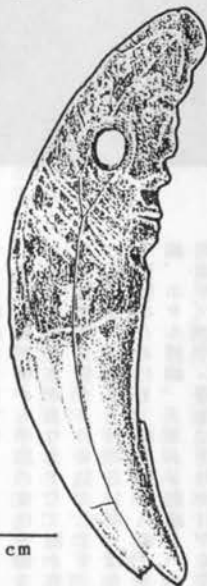


図2 歯根部に穿孔されている上顎左犬歯、柘原遺跡出土(鈴木・西沢、1966)

踵骨の全長は五七・二五mmで、現代柴犬の三二・六五mmに比較して著しく大きい。単純比例計算では、このオオカミの体重は六六kgと推定される。中部ロシアの現生オオカミの体重は、雄三四一四九kg、雌三〇一四二kgであるが、時に七二kgから八〇kgに達するものがあるという。また、カナダの現生オオカミ成獣の体重は、二六一七五kgであるといわれるから、柘原のオオカミは、現生オオカミのうちの大型の部類に含められる立派な体格をしていたようである。

出土した上顎犬歯三点のうち二点には、加工痕が明瞭であり、特にそのうちの一点では、歯根中央部に径四mmの円形の孔がうたれており、垂飾として用いられたものと考えられる(図2)。現在、本州、四国、九州の三ヶ所くらいの縄文時代貝塚その他でオオカミの出土が知られているが、下顎骨や犬歯に穿孔などの加工痕をみることも多いとされ(金子、一九八三)、オオカミの骨や歯に、何か特別な意味を感じていた気配がうかがわれるのである。

下顎第一大臼歯(裂肉歯)は、オオカミの歯のうちで最も大型の歯である。柘原出土のそれについて計測すると、歯冠近遠心径(前後径)は二九・一五mm、頬舌径(幅径)は一〇・五mmである。手許にある血統証つきの秋田犬(雄)のそれらは二二・六五mm、一〇・六〇mm、シェパード(雌)二二・三・四〇mm、九・二五mm、ポインター(雄)二二・五・六五mm、

一〇・四〇mm、柴犬(雌)一七・七〇mm、七〇mmなどで、これらに比較して、栃原のオオカミは著しく大きいことが明らかである(図3)。

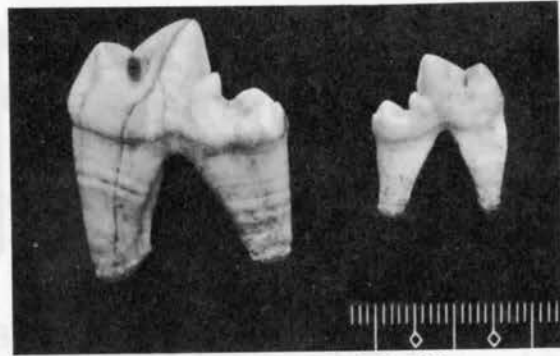


図3 下顎第一大臼歯(裂肉歯)舌側面
左: 栃原遺跡出土オオカミ(右側)、
右: 現代柴犬(雌、左側)。

三 小型化したオオカミ
周知の如く、日本のオオカミは明治時代末に絶滅しており、先史時代および歴史時代のオオカミの歯の大きさを知る資料もきわめて少ない。それでも、直良(一九六五、一九七二)、長谷部(一九四一)などの努力によって、断片的ながら資料が集積されてきた。これらの資料との比較によって、栃原出土オオカミの大きさの、時系列中における位置づけを考えてみよう。

下顎第一大臼歯の歯冠近遠心径に対する頬舌径の関係は図4のようになる。

後期更新世出土の化石オオカミは最も大型であり、特に青森県尻屋崎産のものは近遠心径が三四・二mmに達している。ほかの三点では二九mm台である。

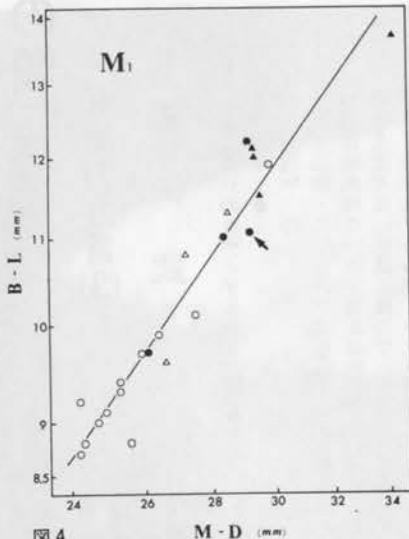


図4 下顎第一大臼歯の歯冠近遠心径(M-D)に対する頬舌径(B-L)の関係
▲後期更新世産、●先史時代産、○歴史時代産、□現代産
△現生シベリア、中国東北部(滿州)および朝鮮産。

よる大型草食獣への狩猟圧も、オオカミの食物の減少をもたらしただろうが、それ以上にオオカミの生活を圧迫した原因が、農耕文化の発達に伴う人口の増加、森林破壊にあったであろうことは想像に難くない。カナダにおいても、近世に至つての、白人の進出によるハビタートの激変が、オオカミの形態学的、

縄文時代のオオカミでは、栃原産の一点を含めて、近遠心径が二六・三〇mmくらいの範囲にある。古墳時代産の一点では、近遠心径が二九・八mmで、上記の後期更新世および縄文時代産の大きさの範囲に含まれる。

戦国時代の一点を含め、江戸時代から明治時代にわたる近世の資料は比較的多い。これらの近遠心径は二四・一七mm台に分散している。

全体的には、後期更新世から縄文時代、さらに近世へと、漸次小型化してきた傾向性が明らかである。このような傾向は、下顎第四小臼歯や第三小臼歯についても同様であった。

四 小型化と絶滅の原因

オオカミは、捕食者として最も成功した陸上哺乳類の一つである。基本的にはその食物を有蹄類に依存しており、有蹄類との緊密な結びつきが、オオカミの生態学的特性と分布を規制しているようである。後期更新世のオオカミは、バイソン、ヘラジカ、オオソノジカのような大型草食獣と共に生活していたが、縄文時代にはこれら大型草食獣はすでにみられなくなっている。これらの絶滅は、後氷期における気候の変化と、日本列島の島嶼化にその主要な原因が求められるのであるが、そ

のことがまた、オオカミの小型化をもたらした原因でもあったと思われる。捕食者の体の大きさは、彼等が食べることでできる食物の大きさとタイプを決定する要因の一つである。オオカミの基本的な食物は有蹄類であるが、それらの得られない場合には、野ネズミや昆虫、さらには果実にまで、その食性の幅を拡げるといふ。餌動物の利用頻度が、より小型の方へかた寄る場合、捕食者は小型化の方向へ淘汰が進むであろう。

ソビエトや北米の現生オオカミの体の大きさは、一般的にはベルグマンの法則に従う地理的変異を示しているから、後氷期における気候の温暖化も、オオカミの小型化を導いた一つの要因であつたろう。

さらにもう一つの要因は、島嶼化に求められよう。食性が特殊化している哺乳類ほど、小さな島では小型化しやすく、食物の需要に対する供給の比が小さく、貧しい環境がそれを招来する。カナダのオオカミにおいても、北極海の島々やバンクーバー島のそれは、きわめて小型であるという。

ここでもう一つ見落してはならない問題に、ヒトの生活との競合がある。オオカミが小型化しただけにとどまらず、絶滅へと追い込まれた原因がそこにあつたと思われる。ヒトによる大型草食獣への狩猟圧も、オオカミの食物の減少をもたらしただろうが、それ以上にオオカミの生活を圧迫した原因が、農耕文化の発達に伴う人口の増加、森林破壊にあったであろうことは想像に難くない。カナダにおいても、近世に至つての、白人の進出によるハビタートの激変が、オオカミの形態学的、

生態学的な著しい変化と混乱をもたらした最大の原因であるといわれる。森林破壊、農耕地の拡大とともに、家畜の放牧域が拡大されると、以前には生息に不適であった地域も、家畜を食物とすることによって、オオカミの生息圏となる場合もあるだろう。ヒトの経済活動との摩擦が、オオカミの運命を左右する鍵となつていくことは、現今のオオカミの全分布域を通じて共通である。オオカミのコントロールが国家的急務であるときえ極言されている地方もあり、明治初期の北海道においてもそうであった。大量のストロキニーネが肉にまぜられて北海道の山野にばらまかれた。北海道の畜産業を発展させるためには、オオカミを二掃する必要があると考えられたからである。捕殺には賞金もつけられた。明治十年には一頭につき二円であったが、その後次第に増えられ、札幌地方では十円にまでなった。しかし、明治二十二年には、すでにオオカミは殆どみられなくなつて、賞金の制度も廃止されたという。

かつては北アフリカを除く全北区のほぼ全域に、オオカミは分布していた。南方へは中国を経てインドにも及んでいた。しかし現在イベリア、イタリー、スカンジナビアおよびバルカンなどを除くヨーロッパ地域で絶滅しており、日本でも明治時代末には絶滅した。日本のオオカミの絶滅だけが、例外的な事象ではなかつたのである。絶滅の年代は、イングランドで一五〇〇年代、スコットランドで一七四三年、アイルランドでは一七六六―七七〇年のあいだであるという。

現在の本州で、ツキノワグマ、シカ、カモシカ、ニホンザルなどのおかれていた状態をみると、近世のオオカミのそれと同じであるように思われて、彼等の将来が案じられるのである。

(愛知学院大学歯学部教授)

ガ・ガン・ガニの類

北アルプス東麓の方言(3)

福沢武一

イイガタ(良いのだ)・アルガタ(有るのだ)等々

イエガタ(同)

1 ノガ(物の、の) 「おれノガだ」(おれの物だ) ○ (分布は略図に「だれノガだ?」(だれの物か?)、皆「ガだ」(皆のだ)、等、多用される。これは古い流れをくんでいる。
この歌は或る人のいはく、大伴黒主がなり(古今集八九九歌左注)：：大伴黒主のものである。
これらもつとさかのぼる。
おのがと思ふ(万葉一三四八歌)おのれの物だと思ふ。
ガはノに等しい。「梅ガ枝」は「梅ノ枝」に等しいように。「ガ物」(物の)の「物」が省略され、ガだけで「物」を意味するようになった。それが万葉・古今のガである。やがてガは「物」そのものを指すようになった。「おれのガ」等のガがそれだ。

これも先のガ(物・の)と別ではない。いずれもかつては中央語だった。現在は方言になって、特に北陸方面に色濃く残っている。北信・中信はその余波である。次のものも同様。
イイガタ(良いのだ) 「長野市及び上水内郡の方言集」
ガンゾ(のだぞ) 「行くガンゾ」 ×
ガンサ(のさ) 「居るガンサ」北安曇南小谷

2 ンが後から添加された。新潟県三条方面にハヤシ言葉がある。「三条のガンは食えないガンだ」
も一つ類似表現がある。

3 最後に、たまたま聞き得たところを付記する。
方(程、ぐらい) 「百円ガ売ってくれ」
南安曇奈川村黒川渡

今から三十年前、乗鞍岳麓の黒川渡を調査したことがあった。相手をしてくれたのは斎藤善一翁で、翁は当時七十歳を越えていた。足かけ二日の聴取はみのり豊かだった。その一つが異風な方であった。それを拙著「信州方言風物誌」第(二)で報じた。後に、それが辞典に採録された。次の514が拙著に与えられた記号である。



これは東歌で、大昔の東国人がこのように歌った。その血が現代まで流れている。逆に現代から古代を保証してもいい。ガは「物」であると共に、「様」「程」「為」「故」を意味する。
わが宿の夕影草の白露の消ぬがにもとな
思ほゆるかも(万葉五九四歌 笠女郎)
：：白露が消えそうなほど私自身が心もとなく思われることよ。
このガも「様」「程」そのものである。ちよつと補言する。同じガニが二つに分れる。「草の生ふるガニ」は「草が生えるように」。 「白露の消ぬるガニ」なら「白露そのものが消えてしまうように」。これに対し、「白露の消ぬガニ」は、「白露が消えてしまふ」というように、私の命が消えてしまふそうだ」の意。又ガニは、他物によって比喩している。(このことはまだだれにも知られていない。)

「草の生ふるガニ」は「草が生えるように」。 「白露の消ぬるガニ」なら「白露そのものが消えてしまうように」。これに対し、「白露の消ぬガニ」は、「白露が消えてしまふ」というように、私の命が消えてしまふそうだ」の意。又ガニは、他物によって比喩している。(このことはまだだれにも知られていない。)

最後に、たまたま聞き得たところを付記する。
方(程、ぐらい) 「百円ガ売ってくれ」
南安曇奈川村黒川渡

今から三十年前、乗鞍岳麓の黒川渡を調査したことがあった。相手をしてくれたのは斎藤善一翁で、翁は当時七十歳を越えていた。足かけ二日の聴取はみのり豊かだった。その一つが異風な方であった。それを拙著「信州方言風物誌」第(二)で報じた。後に、それが辞典に採録された。次の514が拙著に与えられた記号である。

ガ 程度・分量などを示す。「百円が売ってくれ」長野県南安曇514、静岡県榛原・京都府竹野・神戸・島根那賀・愛媛・高知(小学館日本語大辞典)
このガは「ガ程」「ガとこ」の下略で、先のがと本質的には別のものではない。
(上田女子短大教授)

博物館だより

石沢 清展 「インドの古寺院」
一水会、日本水彩画会、慈善会の各会員で当館美術部門の嘱託員でもあられる画家、石沢清先生の個展が東京で開かれます。関東地方にお住まいの読者の皆様、ぜひおでかけになってください。
会期 昭和61年3月24日(月)29日(土)
会場 資生堂ギャラリー(銀座8丁目、資生堂ビル9階、午前11時～午後6時30分まで)

皆様の声を募集します
本誌「山と博物館」は皆様のご愛読に支えられて今年発行31年目を迎えました。編集部ではこれを契機に、一層親しまれる紙面を願って、読者の皆様の投書を募集します。本誌内容に関する意見、質問、要望はもとより、北アルプスとその東麓の自然と民俗、登山に関するご質問でも結構です。
400字前後を目安に編集部宛でお願いします。皆様の「声」には紙上でお答えするかも、直接ご返事さしあげます。

山と博物館第31巻第3号
一九八六年三月二十五日発行
発行所 長野県大町市 TEL 220-2111
印刷所 大町山岳博物館
大町山岳博物館
定価 年額一〇〇〇円(送料共切手不可)
郵便振替口座番号(長野四一)三一九三